

「終止符のない」昔話の叙述

— 接続詞「さて」からみる昭和四十年代の叙述の交代 —

小林 美佐子

はじめに

現在でも、昔話は語られている。図書館や本屋の子どもの本のコーナーの一郭、あるいは地域の近隣センターの毎月の「おはなし会」や学校の授業の二枠で、母親たちなどによる昔話の語りの場がある。また、大人を聴衆とする昔話の語りによる昔話の各地に場は設けられている。語りの催しの企画立案される地域は、地方であっても、昔話に対しての情報もあり人々のアンテナも高い都市部地域である。語る人聞く人が、都市部に暮らし、近代学校教育のなかで育った人々でもある。現今、昔話には、〳都市〳〳〳公〳〳において育まれている側面がある。

そうした催しのなかで、昔話に「…さて、…」と場面をつなぐ語りに遭遇することが少なくない。その一方で、音資料として残されている「伝承の語り」と呼ばれる語りに、「さて」の使われている例がほとんどない、ということがある。

公の聴衆をまえにして、話の間合いに「さて」を使う、ということはあるだろう。近代、子どもに向けての「おはなし」・童話に、「さて」が、常套語のように使われてきた歴史的経過もある。既に現代の語るひと・聞く人の多くが、童話・再話を読み聞いて育った世代の人々であれば、昔話に「…さて、…」を聞いても聞き手に違和感はないのかもしれない。背景には、現代の昔話の置かれている新たな環境のほかに、話し言葉も含めた近代日本語の叙述の移行があるのではないだろうか。昔話を聞く語る人・聞く人の日常言語自体がすでに変わってきている。現代の昔話は、現代の日常言語の在り様に囲い込まれつつ、また新しい様相をもって育っていくのに違いないが、本稿では、近代日本語以前からの語りというようなものがあるものならば、その叙述がどう変わったのであったか、「さて」周辺の叙述に焦点をあて、昭和四十年代以降急速に広く行われた記録・再話の一つをとりあげて、その比較を試みたい。

1、再話本・ストーリーテリングのテキストにある接続詞「さて」の機能

接続詞「さて」には、A・B二つの機能がある。

A 《「()として」「()したら」のように》、同一の時間の帯をそのまま縦につなぐ「さて」

B 《「()と()」のように》、同時並行の別時間をそこにさし挟むとき及びそれをもとに戻すときにつかう「さて」

接続詞「さて」が、文を区切り、文末を作るところにのみあることはいうまでもない。A・Bいずれも、叙述の流れをいつたんは切り、まとめ、整理する語ではある。特にBの「さて」は、文脈を一旦切った上で、逆向きに話を振り返り、話の場面の時間空間を整理して、話を仕切りなおす叙述の上にある。現代、昔話として享受される翻訳・再話の昔話や昔話のパフォーマンスに珍しくない接続詞「さて」には、このBの機能をもつてつかわれている「さて」がある。そして一方、音資料に残されたいわゆる「伝承の語り」に、わずかの例外を除いて、この「さて」がない。

2、「さて」のない語り・『昔話研究資料叢書』の記録

明治三十、四十年代から大正生まれの伝承者の話は、調査・研

究者の、速記、テープから文字化されたもののほか、ソノシートやCDで音にして残されたものがある。昭和四十年代以降、昔話は、調査の場で、速記からテープに手段を替えて翻字されたが、テープという手段を得たことで、それらは後年ソノシートやCDで、音にして残された。公刊されている音資料、①『昔話研究資料叢書』のソノシートに「さて」はなく、②日立CD音資料『みちのく昔話集第一集・第二集』⁽³⁾の録音にも「さて」は一例を除いてほかにない。①②の音資料に残されている話の語り手の叙述が、すべて一律に同じであるのではむろんない。しかし、調査テープからおこされた語りに、「さて」がない点では一致している。

今回再話との比較で取り上げる『昔話研究資料叢書』大山北麓の昔話』のソノシートは、巻末の録音資料をカタカナ書きで文字化した「方言資料」と「語り手一覧」の記載から、明治十年（一八七六）生の谷口はつ九十二歳、明治二十八年（一八九四）生まれの岡田幹子七十三歳、明治十九年（一八八五）生の川上貞蔵八十三歳のとき、昭和四十二、四十三年の録音と知られる。彼らは、江石谷江（一八五七？生）より一世代あとの人々ということになる。いまだ村落共同体の中で縦に祖父母から耳で話を聞き覚えたいわゆる「伝承の語り手」と呼ばれる人々の語りである。谷口はつは『食わず女房』の録音は、『探訪者名簿』に「昭和四十三年（一九六八）十一月十一日、十二日稲田和子」とあるこのときのもので、録音の中間こえる控えぬあいづちは、

稲田氏のものとおもわれる。

昭和三十、四十年代の録音を資料化した『昔話研究資料叢書』は、明治十年、二十年生まれの語り手の話を、音として、またカタカナ書きで文字として残している。すべての巻がソノシート付ではないが、各巻に付された『昔話研究資料叢書の刊行に際して』で、企画編集委員の言に、「語りに即した翻字を企図する」とあるように、ソノシートのついていない巻も、できる限り語りをそのままに文字化しようとする姿勢で編まれている。

3、「さて」がない——『昔話研究資料叢書—種子島の昔話I』「大蛇と千人針」の叙述

次に示す【資料1】「大蛇と千本針」は、『昔話研究資料叢書—種子島の昔話I』（以下『種子島』）本文である。この巻にソノシートは付されておらず、この話もカタカナ書きの「方言資料」でないが、録音翻字収録し、『種子島』を編纂した下野敏見は、凡例で、「語りそのものに忠実な、正確な文字化を原則とし、句点・読点は一般の表記に従わず、語りの口調に従った」（凡例）「本書は、語り手の語り口をそのまま文字化したもので、録音の完全文字化を試みたものである。（略）いたずらに間投詞が多かったりして、はがゆいところがあるかもしれない。」と翻字に関して述べている。「大蛇と千人針」は、語り手

の山下正吉（明治四年生）九十一歳、昭和三十六年時の語りである。

【資料1】

なながむかし①。まあ、あつたにして聞かねばならんとなあ②。そしたいばその、田の堰口い、行たちえみたいば、太か蛇が、うつばまつて、その田あ、水が来んたちゅうから③、そして、蛇い、

「*《主が》田あ、水お掛けちえ呉れえ」ちゅうて④。

「*《主やあ》、姉妹三人、女子ん子を持つちえいから、その一人を、お前に呉るいから、掛けちえ呉れえ」ちゅうて⑤。

そしたいば、掛けちえ、さつそく、連えかあ来たそうじやなあ⑥。そいも、一番の尻の女子が、《主が》行く」ちゅうて⑦。そして、

「*《主い》、その、物縫針をば、千本買うて呉れえ」ちゅうて⑧。着物の縫うX針を千本買うちえ呉れて、そうして持つて行たて、その入り口い立つちえたいば、蛇が出て来ちえ、

「*《主い》、虱よう取つて呉れえ」ちゅうて、その蛇が言うて⑨。そしてその、鱗う一つ持上ちやあ、針よう突つ込み、

鱗う一つ持上ちやあ、針よう突つ込みみて⑩。

「わざい（大そう）、その、味わあ（気分）がよか」と、

蛇が言うて⑪。そして、千本の針よう突込うじえしもうて

ちえそら、一時したいば、その蛇が、堰口さなあ、駆込うじえ行た

ちえ¹³。

せいじえその**女子あ**、戻つちえ、そうしちえ、

「どうしちえ来たか」ちゅうたいば、

「行たちえんで（行つて見れ）。堰口い、死んで浮いちえ来たから。そしちえ、^{うっちえい}打置ちえ来た」ちゅうて、¹⁴言うたBちゅうて。

そうしちえ、母と行たちえ、^ひそ引き上げて、そして、木を拾うて、^や焼あて、¹⁵食うたCちゅうて。そこうさのむかし¹⁶。

この「大蛇と千本針」の叙述は、傍線部A「浮いちえ来た」ちゅうちえB「言うた」ちゅうC「食うた」ちゅうてとあるように、伝聞の形で言われている。また、**蛇い・女子が**・**蛇が**・**女子あ**と、それぞれの箇所で行為の主体はひとりしか示されず、たとえば二重点線部X「針を千本買うちえ**呉れて**」では、「呉れて」という表現で、「父が買って」と言わず、「買った」行為の主体「父」が明示されていない。⁵

叙述の特徴を整理すると、次のa～dをあげることができる。

a 《…ちゅうて》伝聞である

b 《て（ちえ）》終止形文末が少なく、連用形で切れずに文が

続いている

c 《主が…》会話文が独立していない

d 会話主・主語が一方のみ明示される

c について、下野敏見が、「話の主人公の会話のなかで、いたる所に、語り手が主人公を指す「主ьяあ」と言う語が出てくる。

これは、「彼は」の意味であるので、会話の中にあるのは、まずい。しかし、忠実に文章化するためには、それを改変してはならない。それで本書では、語るままに《主ьяあ》と記すことにした。」と解説で述べているように、*《主が》《主ьяあ》《主い》と、語り手にとつての地の文と会話文の区別が、現代語のそれと異なっていることがわかる。この『種子島の昔話I』の語りは、Bの機能の接続詞「さて」がないだけでなく、文の切れ目自体が少ない。

下野敏見は、bについてもまた「ちえ式がずつとづついていく。」「この方式は、種子島の昔話の全部に、多かれ少なかれ、共通することである。「ちえ」の下に句読点を入れて切っていくけれども、どこまでいっても終止符はなく、最後に一つだけある、というような語りの形式が基本になっている。」（解説 五 資料としての特質（1）語り口）とも述べている。いわゆるように、なかなか文末にならず、連用形で切れ目なしにつきの事柄に続く。地の文で句点の箇所は、①から⑩。そのうち、④から⑩まで⑥、⑭の二箇所以外は「ちゅうて」で、この「て」は、「して」の「て」すなわち「ちえ」なので、完全に切れる文末は⑨「そうじゃなあ」・⑭「言うちゅう（という）」の二箇所だけになる。「終止符のない語りの形式」になっている。「さて」は、文脈を一旦切つて、逆向きに話を振り返り、話の場面の時間空間を整理して、話を仕切りなおす意味をもつ。接続詞「そして」「そしたいば」「そうしちえ」はあるが、切れ目無し

に次から次へ話を続ける。この「資料1」などの述べ方に、接続詞「さて」がなじまないことは明らかである。

昭和十一年（一九四〇）、岩倉市郎は、『おきのえらぶ昔話』に、速記に基づいて、文と文を接続するシマのことは「**「さて」**を《…ところが…したところが…ら…時は…と…なら》と標準語訳しながらも、シマの昔話の叙述の流れの整序はそこにとどめて、文末の少ない、「**Kya**」でつぎつぎ文が繋げられていく叙述を、そのままに記録した。この『種子島の昔話』の「ちえ」はその『おきのえらぶ昔話』の「**Kya**」と近似の接続助詞だろう。

「で」で続けていく区切れない語りは、「種子島」だけでなく、多い少ないはあっても「大南北麓」にもみられる。限られた地域の語り方でない。下野のいう「語りの形式」は、種子島や岩倉のおきのえらぶ島だけでなく、かつて語られていた伝承の昔話の語り方であったのではなかったろうか。『おきのえらぶ島』にも、接続詞「さて」は記録されていない。⁽⁶⁾ 終止符のない語りの「形式」に、接続詞「さて」が使われることはなかったのである。

4、「さて」が入るー時間の整序・話の整序

「さて」の有無と、その昔話全体の文体とは連関しているようだ。「さて」が加わると、その前後の叙述が変わる。文字化した

「伝承の語り」と同じ話の再話を比較して、「さて」が加わると周辺の叙述がどう変化するかを見る。

上段に「資料2」「さて」のない「伝承の語り」、下段に「資料3」「さて」のある再話を示す。

資料2 「大南北麓の昔話」

42きろ松つつあんの話

（略）そかまあ、きろ松つつあんは、歩いてみゆうかいつて歩かりようつたところが、へえから半ごろになつたところが、きや新しい墓のある所へ行かれたさあわいな。へからなあ、新しい墓見て行つたら、暮れてしまつたけ、どつちも行かれんだつてな。まあとつちも行かれんことへ暗らになつたが、まあこの墓へ、泊まらしてもらおかい、と思つて、いつそなあ、だちが手へ掛かつた思やあ、こがな、⁽⁷⁾ 恐てえ目をせえでも

資料3 「子どもに語る日本昔話」

本の昔話

「朝日長者と夕日長者」（略）一方、きろ松はほとんどん歩いておつたら、にわかにあたりがくらくらなつてきた。昼から日暮れまでにはまだ半分しかたつていないと思つのに、前にも進めず、後帰りもできんようになつた。見まわすと、すぐそばに新しい墓があつたので、きろ松は、
「なあ、⁽⁸⁾ 仏さん、日が暮れて動かれんけえ、ひと晩宿をかしてくだされよう」とたのんで、「おとろ

ええに、と思つて、墓の門へ、「この仏さん、今夜動かれんけえ一宿宿う貸してくだされえ」てつて、墓の門へ寝ておらはつたちゅうわいな。寝とつたところが、墓の石がぐらぐらぐら動きだいてな、せいから、とても、今夜取られるだけえ、だちが手へ掛かりやあよかつたい、と思つて寝とらつたら、a 白い着物きて出て、「きろ松か、きろ松かい」てつて言うださなわいな。そつて返事ゆうしたら、「(b) わしが死んだらこそな、わりやこがな難儀ゆこくだが、紅という扇ゆうやるけえな、寒けりやあ、『衣服を授けて下され』と言つて、天に向かつて招きや、着る物が落ちてきて着られるし、そえ

し、おとろし」と思いながらも、墓のそばへ寝ることにした。寝ておつたところが、にわかに墓がぐらぐら動きだした。「やあれ、情けなや。今日までの寿命であつたか。なら、いっそあれたちの手にかかつて死んでしまつた方がよかつたか」と、きろ松がなげいておると、とうとう墓石がたおれた。そうして a 白い着物を着た者がばろんと出てきて、「きろ松か、きろ松か」といいながら近づつてきた。

きろ松が「はい」と答えると、

「b わしはおまえの母だわいや。わしが死んだからこそなあ、おさないおまえが難儀をするのだが、ここに紅という扇がある。これを

から、腹がすきや、『扶持かたあ、授けて下されえ』てつて天に向かやあ、食物が落ちてくるけえ、こつで、こりよう持つてさやおりやあ、難儀ゆうせんけえなあ」てつて、去なはつてしまつた。c ああ母親だつたわいと思つて、d 居らつたら、ちようど家からの半ごろだつたさあなわいな。

1 ぞから、歩きよつたら村へも出るしして、歩きよつたらちようどわが家みたやな、大けな、分限者があるさなわいな。そえか

やるけえ、ひもじければ天に向かつて、『食べ物さずけてくだされ』というて招くがええ。寒けりや、『着る物をさずけてくだされ』というて招けば、着るもんがおりてくる。これさえ持つておりやあ、難儀をせんけえなあ」といつて、扇を一つにぎらせてくれた。「c ああ、母に会えたか」と思うまに、d 白い着物すがたはぼつかり消えて、あたりは霧が晴れるように晴れやかになり、ちようど先ほどと同じお天とうさまの高さで、暮れるにはまだ間があつたそうな。

1 さつてきろ松は、扇を大事にしまつて歩きつづけていると、はじめて見る村里へ出た。ちようどわが家のように大きな長者の屋敷

ら、大けな分限者でま、手代だやらなんだやら、「あの駄飼いなと、さしてもらえりやあせんだらあか」てって、頼んだら、「ま、頼んでみたるわいや」てって、奥へ入て、頼まれたら、「ま、んなら、そこへ入らしてみやれ」てって旦那が言われるで、「これ、入つてみとや」てって、言わはつた。入てみたら、「丁寧げな、ええ子だけ、置いたれやれ」て、旦那が言われたがな。それから、居つて、「素直で、よう言うこと聞いてええ子だ。わりや何ちゆう名だいや」てって、みんなが聞かつたつて、「俺やあこがな者だけ、名つてありやあせんけ」て、「世話あ焼いて駄飼いするだけ、『だかやだかや』つ

の前を通りかかつたので、きろ松は、いっそここで使つてもらおうかという氣になつて、頭を下げて頼んでみた。「牛や馬の世話をする駄飼い子でもええですけえ、こちらにおいてくださらんか」「ま、ここへ入らしていい」とその家の番頭がいつて、長者に会わせてくれた。「ていねいげなええ子だ。おいたれや」長者のことは、きろ松はその家ではたらくことになつたが、上の人のことを聞いて、裏表なしによくはたらいた。けれど、「おまえはなんちゆう名前だ」と聞かれると、「おれのような者に名前はありせんがな。おれは、牛やら馬やら世話をする

てごせえ」 e と言つて、ほんなら言わはつたけ、 f みんなが、「だかやだかや」言つて使やあ、よう言うこときくし、ええ子ださあなわいな。

2 ぞえかまあ、そがいて、g その日から、暮いて、大けんなつて、ぞえから、ちようどまあここへ、譬えで八橋、ちゆうやな所は、ええ、がいな選宮があるだつてな、そつてみんなが、「ええ選宮だけえ、参らあ。若え者あまたでも、ま、あるだけえ、年寄りやみんな参て、若え者が留守りするだ」てって、言つてみんな出られるわな。 h 「だかよ、わあも参らあや」「俺のような者あ、参たつていけんけえ、俺やあ家ゆう、留守する」つて、ぞえか

駄飼い子だけえ、『だか』とよんでくだされ」と、㊦ わらつてすませたと。

2 さて ㊦ きろ松はその長者の家で、「だかや、だかや」と重宝がられて、暮らしているうちに、背丈ものびて、やがて一人前の若者になつたさうな。

ある日、長者の近くの町で選宮があつた。選宮というのは、いい本殿ができたときにお宮さんの本体をお入れする、つまり「宮うつし」のお祭りのことだ。「またとない選宮だ。みんな参ろうや」といつて、長者をはじめ男衆も女子衆も、家中の人がみんなきれいにめかして参つた。ただお嬢さ

て拜んで、また降つて戻る。
「まあ今日は、珍しいもん見た」てつて、みんなが言つて話いて、戻つてこられる衆が、「だかよわいも、参らあてつて参らだつたが、珍つらしい物う、今日は見てきたとみい」「どがなもんで」「まことに『この若殿さんだらあか』てつて、みんなが見たが、若殿さんがまことに、『馬は、竜の駒ちゆうもんだらあかいや』てつて、見て、とうとう、わりやまあ、ほんにだかや参らあで見なんだだか」「ええ物う見てござつたのう」てつて、けえ、だか言つとるしなあ、けえ、戻りや戻る者がそが言う。

お祭りからもどつて来る人たちは、
「まあ、今日はめずらしいもんを見た」
「だかよ、おまえも参りやあよかつたのに」と口ぐちにいうそやな。
「ふん、どがなものを見ただ」
「どこの若殿さんか知らんけど、まことにりつぱな人がお参りしなはつた」
「男でもほれつくような男ぶりだ。それに乗つとる馬のみごとなこと、あれが竜の駒ちゆうもんだらう」
だかは「そりや、ええもん見たのう」と、知らん顔であいづちを打つたが、もどる者もどることに同じことをいうて聞かせた。

誰もだれ居らんはずに、馬の音がしたがまあ、と思つて、ちよいつとのぞいて見なはつたら、**k** 具合が悪なつてや、そつからなんほう医者あかつたつて治りやあせず、ええ易者来て占つてもらわつたら、(略)

たつても、まくらから頭があがらん。医者に見せてもさつぱりよくならんので、易者をよんでみてもらつたところが、(略)

資料2 『昔話研究資料叢書—大山北麓の昔話』東伯町、谷口はつによる「きろ松つつあんの話」

資料3 『子どもに語る日本の昔話①』稲田和子稿本、「朝日長者と夕日長者」である。

稲田浩二・福田晃編『昔話研究資料叢書4 大山北麓の昔話(以下「叢書」)』は、昭和四十二年(一九六七)から四十四年(一九六九)、大谷女子大・親和女子大の学生を率いての共同調査と、学生による採話・基礎的な翻字に基づいたものであることが、「あとがき」に記されている。資料3の再話は、資料2にあげた稲田浩二編『叢書』ではなく、翻字資料に近い原稿を手元に行われたと想像される。あるいは谷口はつの特

プを聞きながらの作業であった可能性もある。

この本の他の話が、再話の原本を、民間伝承の会『昔話研究』や未来社『とんと昔があつたけど』『すねこたんばこ第一・二集』などの書名をあげているのに対して、この「朝日長者と夕日長者」は、巻末に「稲田和子稿本」とある。

再話本に「さて」は、123の箇所に入っている。12は、それぞれ「それから」「さえからまあ、そがいして」を、「さて」にかえたところであるが、③は、接続詞の入ってないところで、文の途中、読点を句点に変えて、文末をつくり、そこで文を切つて、段落をかえ、その冒頭に「さて」を入れたものである。

「さて」2の前後、『叢書』の《だかやだかやつてごせえと言つて》を「わらつてすませたと。」主人公の「いった」行為を意味づける表現で言い換えている。《e言つて、ほんなら言わはつたけ、fみんなが、「だかやだかや」言つて使やあ、よう言うこときくし、ええ子ださあわいな》を、《f重宝がられて》とまとめている。2そえかまあ、gそがいして、その日から、暮らいて、大けんなつて、そえから、ちよんどまあこへ》を、《2さて、①きろ松は》と、接続詞を「さて」にかえ、主人公を明示し、前文の《fええ子ださあわいな》をまとめてここに入れ込んで、《背丈も伸びて、やがて一人前の若者になつたそうな》と、ことがらにつながりをつけている。時間的に順序だて、文を切つて、段落がえをして、次の段落の最初には

「ある日」をいれている。

「さて」を入れたところで、再話は、文を切り、場面の時間・空間を整理している。「さて」の有無は、単独の変化でない。叙述の整序と「さて」の有無は、連動している。

hからiの箇所、iの直前、「さえから…留守うしとらはつた。」は、下野の翻字は句点であるが、こは挿入部分で、《h「留守うする」つて》は、《iへかまあ、ほんに…》につながり、文は切れず、続いている。再話のほうは、挿入がないので、お嬢さんの文を、hの前に出して、「て」でなく、「が」(逆接)でつなげ、先ほどまで行かないと言つていたきろ松が行く気になつた状況を、「ふと」という副詞で文脈を整理している。

iも、だかの参拜とお嬢さんがだかを見かける時間が前後しているところで、『叢書』はそのままでが、『再話』は、jを3さてのまえに出して、一貫した時間の整合性をつけている。そのため、かえつてjからkへお嬢さんがだかを見初めて具合が悪くなった話の運びが見えなくなり、そこに接続詞「一方、」を入れる必要が生じてきている。

時間が、整序された叙述のなかで、場面の描き方にも変化が見られる。登場人物の行為が、話の枠外の視点で整理されている。「さて」1の少し前、亡母との対面の場面で、再話本は、傍線部a亡母の出現を《a白い着物を着た者》がばろんと出てきて(以下傍線引用者)と「着た者」としている。『叢書』は《a白いきもん着てて》である。

《b》「わしはおまえの母だわいや。」と、『叢書』になかったことわりを再話を入れている。

《c ああ母親だったわい》が《c》「ああ、母に会えたか》に。《d 居たら》が、《d 白い着物姿はぼっかり消えてあたりは霧が晴れるように晴れやかになり、》と説明を加えている。

反対に『叢書』のほうの語り手に着目すると、『叢書』の語り手は、「白い着物を着た者」といわず、《a 白いきもん着てでて》と言う。『再話』が前もって《b》「わしはおまえの母だわいや。」とことわりを入れるのに対して、そうしたことわりなしに、いきなり《c 母親だったわい》と主人公が言う。『叢書』の語り手は、亡母の出現を奇異なものとするところから話を語っておらず、出来事を語る目線は「しろ松」が母を見る目線と変わる所がない。語り手は、登場人物と出来事に対して話を設定して語りおこなっているのでない。立ち位置は、話の外にな

「しろ松つつあんの話」が終始話の内側で語られてきたわけではない。語りはじめの《昔あったところになあ、朝日長者という、大けな長者があったさあなわい。》以来、語り手は登場人物や出来事を対象化して語り進めてもきている。にもかかわらず、ここで、登場人物が見ている対象を語り手自身も見たという語り方をさせているのは、語り手自身にしろ松の「母」を「見た」という実感を伴った記憶ではないだろうか。「せうな」と伝聞であるから、聞いたことを語っていると認識もあるは

ずでありながら、同時に語り手谷口はつにある「見た」記憶の実感である。場面を見たのではなく、場面のなかでしろ松の「母」をしろ松と同じ目線ではつは「見た」のであり、この実感が、谷口も含めて「伝承の語り手」と括られる人々にある一定の感覚としてあったのではないだろうか。⁽⁸⁾

この感覚は、聞いたことだが、見たことだとなり、矛盾するといふべきだろうが、話を外側から整序する観点を持たない叙述の上で、話の内側に行く語る人・聞く人にとって矛盾は必ずしも認識されないだろう。《着た者》と言わず《着てでて》と述べる語り手に出来事を振り返り、話を仕切り直す観点はない。次々目の前に現れる景色を、ひたすら言葉にし続ける。叙述の仕方が異なる再話になると、その記憶の実感は消えてない。

5、「さて」について

「さて」に話を戻すと、『おはなしのろうそく』のほか、瀬田貞二『日本のむかしばなし』・松谷みよ子『松谷みよ子のむかしむかし』・おざわとしお『日本の昔話』など、多くの読者をもつ昔話読み物の大半に「さて」はあ

昔話の研究・調査が広範囲に進められた昭和四十年代以降、昔話の童話・再話もまた、それ以前のものとは異なる様相を呈するようになったといわれている。研究や資料を踏まえた書き換えがなされ、話し柄・エピソード・登場人物の行動契機など、

なかった話を書き加えられていることは少なく、四十年代以降の昔話童話・再話は、それまでの坪田譲治や木下順二らのそれとは異なるものとなっている。とりあげた再話本は、聞き書きから起こした再話である。文字化を経てはいるが、「語りに即した翻字を企図した」『叢書』が記した谷口はつの語りと再話を含めた現代の語りの叙述の相異は、再話がかかれたものであること、再話者という個人や現代の語りのあり方等を越えたものであったろう。

「さて」を使わない明治十年生まれの谷口はつの語りから、「さて」をつかう平成七年（一九九五年）『子どものための昔話』へ、さらにそこから「さて」を多用する現代の昔話の語りまで、昔話の叙述変化の背景には、昔話もまた、話し言葉・書き言葉を相互に越境して変化した近代日本語の叙述の交代という流れのなかにあったことを考えるべきだろう。終止符のない未整序の叙述形式でいまだ語られていた昔話が、この時期およそ昭和四十年代前後、新しい叙述形式に取り込まれて語り口を変えてきたのだとすれば、この時期、再話や童話がより昔話に忠実であろうと変化しつつあった一方で、昔話は質的变化を余儀なくされ、節目の時期を迎えていたことになる。

区切れが明確な、文末の多い、整序された再話の叙述でなければ、「さて」は使われない。「さて」に起因して、昔話の文体に変化がもたらされたのはでないが、昔話の叙述変化が、それまでも講話や童話などに使われてきた「さて」を、昔話の再

話に使用を促したということだろう。

6、近代の欧文体・現代の昔話

明治の昔話読み物に「さて」は少なくないが、巖谷小波の『日本昔噺』叢書はことさらに多い。『家庭お伽話』は、各篇西洋と日本ものを二話ずつ掲げ、例えば第十九篇では吉岡向陽が「青髭」・高野斑山（辰之）が「鶴取兵衛」と分担するなか、毎回ではないが、ともに一話につき数回の「さて」を使っている。¹⁰ 佐々木喜善の『江刺郡昔話』『東奥異聞』『和賀郡昔話』『聴耳草紙』も同様である。明治期刊行の講話・読み物の悉くが「さて」を使っているわけではない。馬淵冷佑（文章作成）・森林太郎（推敲）の『日本お伽集』、馬淵冷佑・水田光の『お伽文学』は、さてを使っていない。大正期に入って、大塚講話会のテキスト『実演お話集』や雑誌『赤い鳥』にも、見た限り「さて」の例はない。しかし、それらも、それぞれ場面ごとに番号をふるなど、「さて」に替わる文章整理の手段は用いられている。

「さて」は、明治以前にも、美辞麗句が文脈をつなぐ江戸の人情本・浮世草子・仮名草子、そして室町物語草子にもあったことばである。明治政府が実用重視の文章教育を提唱するなか、明治八年（一八七五）林多一郎・中島操の『小学作文方法』は、実用を重んじ、江戸の戯作風的美辞麗句を廃して、欧文体の文

字の用法・文体を誦いながら、模範文例は、江戸以来の実用的文章で、そこにも「さて」はある。⁽¹²⁾ 接続詞「さて」は、文章整序を示すに易い語であったと思われる。

昭和四十年代はこれより百年後になるが、再話、室町・江戸の草子ものや巖谷小波らの講話・読み物にあった「さて」を使いながら、同時に、明治政府が提唱しようとした文体の整序を体現した。一方、未整序の文体は、こうした巖谷小波の講話とも明治政府の実用重視の文章教育にも紛れず、伝承者の語る昔話というところで、昭和三、四十年代の時期までとどめられた。昭和十一年（一九四〇）岩倉市郎は、シマのことは「タビ」を標準語訳しながらも『おきのえらぶ昔話』に整序されない叙述で昔話を記録した。昭和四十年代は、その整序されない叙述がいまだ残っており、消え始めもした時代だったことになる。

接続詞「さて」の有無は、「伝承の語り」か否かを二分するものさしでない。「さて」は、語り手が叙述にある整序を加えていることを示す目印の一つである。

資料5に掲げた『小学国語読本 尋常科用巻一』の「シタキリスズメ」には、「さて」も「さて」以外の接続詞もない。説明・断わり・理由付け・内心の説明もないが、『種子島』の「雀の恩返し」⁽¹³⁾の語り口は跡形もない。

伝聞・区切れない叙述・主語の不提示が、伝承の語りの叙述の特徴であると、⁽²⁾、「さて」のない語り・『昔話研究資料叢書』の記録⁽¹⁴⁾で述べた。**資料6**の伝承の語りにある三つの特

徴が、**資料5**の教科書の昔話にはない。

資料5

（略）シタキリスズメ、オヤド ハ ドコダ^①。シタキリスズメ、オヤド ハ ドコダ^②。「オジイサン、ヨクキテ クダサイマシタ。」「サア、オアガリ クダサイ。」^注スズメ^語ハ、オホヨロコビ デ、オジイサン ヲ オサシキヘ トホシマシタ^③。^注スズメ^語ガ、オジイサン ニ、イロイロ ゴチソウヲ シマシタ^④。オホゼイ デ、ニギヤカニ オドリマシタ^⑤。オミヤゲ ニ ツヅラ ヲ アゲマシタ^⑥。オジイサン^注ハ、タイソウ ヨロコビマシタ^⑦。「サヤウナラ。」「サヤウナラ、ゴキゲン ヨウ。マタ オイデクダサイ。」^⑬

資料6

（略）そして、せいから尋ねて行く事でしたが、「雀よ、雀」ちゅうて、何つ時も、声を掛け通して、遠か所まで尋ねて行たて、やつとで尋ね着いてなあ^①。せいから、一生懸命それ、雀に可愛がられて、爺さんは、そしてもう、「暇をせんばじゃ」と言うて^②。「爺さん、どうしても、来年の春はなあ。また遊びに来て呉れえ」ちゅうて^③。「必ず来るから」と言うて^④。⁽¹⁴⁾

現代の昔話の担い手が受けた昭和初期の学校教育は、このよ

うな教科書文の昔話を昔話と教え、人々は、これを暗誦して育った。伝承の語りが、伝承されなくなりつつあった「家庭」では、翻訳ものの昔話集や童話昔話が読まれてきた。学校言語・翻訳言語の浸透が、区切れない未整序の文体を、書かれた昔話だけでなく、語る昔話からも遠ざけつつあることが想像される。

叙述交替以前の未整序の終止符のない語りにおいて、例えば「種子島」の「大蛇と千本針」では、「死んじえ、浮いちえ来た」大蛇の姿は、語り手・聞き手共に確かにそれを見、その出来事を体験した記憶が密に共有されるものであった。それが、担い手と担われる場の交替をうけて叙述が整序されると共に、現代の昔話は、語り手・聞き手双方にとって体験の記憶を伴わない間遠なものに質をかえつつあるのかもしれない。

注

- (1) 藤田浩子『かたれ やまんば 第一―五集』(一九九六―二〇〇三 藤田浩子の語りを聞く会) など、語る人のためのテキストや語る現場で「さて」がつかわれている。「さて」については、拙稿「昔話の叙述―「さて」のある叙述・ない叙述」(小澤俊夫喜寿記念論文集『昔話研究の諸相』二〇〇七) に述べた。

- (2) 稲田浩一・福田晃『大南北麓の昔話』一九七〇ソ

下野敏見『種子島の昔話Ⅰ』一九八〇

小堀修一『那珂川流域の昔話』一九七五ソ

丸山久子『陸奥二戸の昔話』一九七五ソ

武田正『飯豊山麓の昔話』一九七三ソ

以上「昔話研究資料叢書」ソソノシート付 三弥井書店

- (3) 佐々木徳夫『みちのく昔話集一・二集』一九九四・一九九五

日立市科学文化情報財団

- (4) 下野敏見『大蛇と千本針』『種子島の昔話Ⅰ』一九八〇

- (5) 「もんにい針千本」(下野敏見編『日本の民話三十三 種子島の民話第一集』一九六二未来社) で、「父親はさっそく町へ出て針を千本買い、娘にそれを持たせて田につれて行きました。」

蛇は、きのういたところにとぐるをまいて待っていました。父親は、「今つれて来とう」と娘を前におしやっておいて、もどって行きました。」とある。

- (6) 「kyā」についても前掲論文に記した。

- (7) 資料2は、(注2)に掲げた『大南北麓の昔話』、資料3は、稲田和子・筒井悦子『子どもに語る日本の昔話』一九九五 こぐま社所収のものである。「朝日長者と夕日長者」は、これより前、稲田浩二・稲田和子『日本昔話百選』(一九七一 三省堂) に再話されており、「さて」を含めて数箇所異なる。

- (8) 本稿は、二〇〇八年第三十二回日本口承文芸学会大会発表時の前半の内容をまとめたものだが、その大会シンポ

ジウムで、齊藤純氏の発言に、小澤俊夫氏の「昔話の原風景」ということばがとりあげられた。「原風景」とはこの「記憶」に見える風景だろうか。

(9) 東京子ども図書館「おはなしのろうそく」全二十五冊『雨のち晴』・瀬田貞二『日本のむかしばなし』一九九八のら書房・おざわとしお『日本の昔話』一九九五 福音館・

『松谷みよ子のむかしむかし』一九七三 講談社

(10) 巖谷小波(上田信道校訂)『日本昔噺』二〇〇一 平凡社・吉岡向陽・高野斑山『家庭お伽話』一九〇七 春陽堂

(11) 仮名草子『新日本古典文学大系七十四』一九九一 岩波書店・浮世草子『同七十八』・室町物語草子集『日本古典文学全集六十三』小学館

(12) 出仕を賀する文

冷気相募候処賢兄益御勉勵奉肅賀候次に賤鯁無異消光候
条御降神被下度候箸楮尊契去月中某県之徴に応じ何官拜
命被成候趣何賀歟過之是多年御研究之功を奏する所なり
随分为国家御尽力可被候右は祝辞申陳度恐々不尽

十一月 日

某拜

某尊契

文案下

(林多一郎・中島操『改正小学作文方法』明治十年)

斉藤利彦校注『教科書・啓蒙文集 新日本古典文学

大系 明治編十二』二〇〇六 岩波書店より引用

(13) 『文部省 小学国語読本 尋常科用卷二』一九三二 大阪書籍

(14) 前掲 下野敏見『種子島の昔話I』

(こばやし・みさこ)『昔話研究士曜会』